

目的意識を持ち主体的に学びに向かう生徒を育成する国語科の学習指導 ～「生徒と創り上げる学びのプロセス」を工夫した「書くこと」の授業を通して～

八重瀬町立東風平中学校教諭 伊 敷 直 恵

I テーマ設定の理由

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えると予測されている。そのため、学校教育においては、「主体的・対話的で深い学び」を通して子どもたちが未来の創り手となるために必要な資質・能力を育成することが求められている。

平成29年度告示中学校学習指導要領（以下「学習指導要領」と表す）国語科の目標には、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力」を育成することが示された。人工知能がいかに進化したとしても、目的や場面に応じて伝え合ったり、必要な情報を選んだり、想像力を膨らませて考えるのは人間であり、学習の基盤である言語そのものを学ぶ国語科の重要性はますます高まっている。

しかし、本県の生徒は、平成31年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査の「目的に応じて」学習することに関する項目で、全国平均を最大4ポイント下回っていた。また、「目的に応じて」思考・判断・表現することに対して実感が伴わない生徒が多いことも明らかになった。

このことを踏まえて、本県においては、「何を学ぶのか（学ぶ意義）」、学習評価の充実を図る必要がある。また、次の学習の見通しや課題の解決に向かう意欲を持って臨み、自己の学びの段階を確認できるような工夫も必要である。

そこで、本研究では、櫻井茂男(2019)が提唱する「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」を「生徒と創り上げる学びのプロセス」の工夫として、国語科の授業づくりに応用していく。具体的には、生徒の意見や考えを取り入れながら学習のゴールや学習計画を設定し、目的意識を持って学ぶことにつなげたい。このように、教師と生徒が共に学びを創り上げるプロセスを工夫することにより目的意識を持ち主体的に学びに向かう生徒を育成することにつながるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

国語科「書くこと」の授業において以下の2点をもとに、「生徒と創り上げる学びのプロセス」を工夫した学習指導を行えば、目的意識を持ち主体的に学びに向かい「目的に応じて」思考・判断・表現する生徒の育成につながるであろう。

- 1 主体的に学びに向かうための学習の動機づけと学習過程を生徒と共に創り上げる工夫
- 2 評価規準をもとに、生徒と学びの段階を設定し目的意識を持って学ぶための学習評価の工夫

III 研究内容

1 目的意識を持ち主体的に学びに向かう生徒を育成する国語科の学習指導について

(1) 国語科で育成する資質・能力について

「学習指導要領」では、国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定するとともに、資質・能力を三つの柱で示した。この資質・能力は、生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせる言語活動を通して育成することと示された（表1）。

表1 「中学校国語科 教科の目標」

中学校学習指導要領（平成29年告示）国語科の目標	
言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	
知識及び技能	(1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し、適切に使うことができるようにする。

思考力, 判断力, 表現力等	(2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め, 思考力や想像力を養う。
学びに向かう力, 人間性等	(3) 言葉がもつ価値に気づくとともに, 進んで読書をし, 我が国の言語文化を大切に, 思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

また、観点別学習状況の評価の観点は、資質・能力の三つの柱に基づく目標や内容の整理を踏まえて、3観点に整理された。

そこで本研究では、「学びに向かう力, 人間性等」を高めることが目的意識を持って国語科の学習に取り組むことにつながると考えた。育成の求められる資質・能力の「学びに向かう力, 人間性等」の育成をめざして研究を進める(図1)。

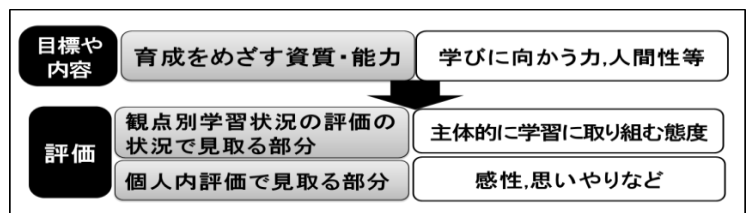


図1 育成をめざす資質・能力と観点別学習状況の評価

(2) 「学びに向かう力, 人間性等」を育成する「主体的な学び」の実現

「学びに向かう力, 人間性等」は、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別学習状況の評価を通じて見取る部分と、「感性, 思いやりなど」個人内評価で見取る部分がある(図1)。「主体的に学習に取り組む態度」の評価には、学習に対する粘り強さと学習の調整の相互の面から見取るため、生徒が振り返りを行うために十分な時間を確保する必要がある。

森本(2020)は、育成すべき資質・能力を氷山にたとえて示した(図2)。「学びに向かう力, 人間性等」は、氷山の深層部分に位置し、顕在化しづらい力と考えられている。

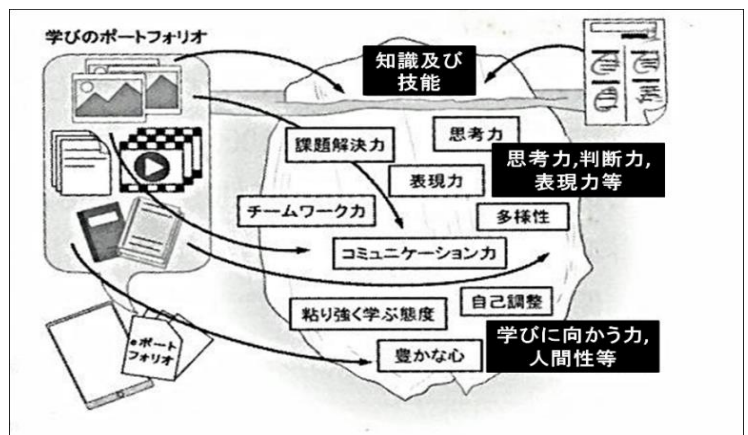


図2 「育成すべき資質・能力の氷山モデル」を参考に加筆(筆者)

しかし、「学びに向かう力, 人間性等」を育むことは、「知識及び技能」や「思考力, 判断力, 表現力等」を稼働させることにつながると考えられる。本研究では、「主体的に学びに向かう態度」の見取りを焦点化し、授業おける振り返りなど個人内評価を工夫する。

(3) 「目的意識を持ち主体的に学びに向かう生徒の育成」のための学習の動機づけ

「目的意識を持つ」とは、「行動の目的に対する明確な自覚を持つ」ことである。「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編」(以下「解説総則編」と表す)では、「自主的, 自発的な学習を促すことによって、生徒が学習の目的を自覚し、学習における進歩の状況を意識し、進んで学習しようとする態度が育つよう配慮することが大切である。」と述べられており、「目的意識を持って」主体的に学びに向かう生徒を育成するためには、生徒を主体に生徒自らが学習に取り組むよう動機付けをすることが大切と考える。

このことについて、小森(2006)は「伝え合う力を高めるために、目的意識, 相手意識, 方法意識, 状況意識, 評価意識など、『五つの言語意識』を明確にすることが必要」と述べている(表2)。「何のために書くのか(目的意識)」、「誰に書くのか(相手意識)」を生徒に意識させて学習活動に取り組ませることは、目的意識を持つことにつながると考えられる。

表2 伝え合う力を高める「五つの言語意識」

伝え合う力を高める「五つの言語意識」小森(2006)	
ア 目的意識	何のために発信するのか
イ 相手意識	誰に書くのか
ウ 方法意識	どういう表現形式で示すのか
エ 場面・条件意識	どういう場面, 状況で発信, 交流するのか
オ 評価意識	相手によく分かるように表現されているか

また、「どうという方法で書くのか(方法意識)」、「どうという場面や状況で発信するのか(場面・条件意識)」

は学習の見通しを持つことにつながり、「相手によくわかるように表現されているか(評価意識)」は、学習評価にもつながると考えた。そこで本研究では、目的意識を持って思考・判断・表現する工夫として小森の理論を取り入れる。

2 「生徒と創り上げる学びのプロセス」を工夫した「書くこと」の授業について

(1) 「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」との関係性

「学習指導要領」では、「生徒の学習意欲の向上を重視」について示され、「解説総則編」では、「主体的な学び」の必要性について述べられている。

櫻井(2019)は、「やる気」や「意欲(学習意欲)」は、心理学の「動機」と同義のもの捉え、「四つの心理的欲求」を刺激・充足することで学習意欲が高まると考えた(表3)。また、『主体的・対話的で深い学び』は、四つの心理的欲求をもとにした自ら学ぶ意欲が実現されることによって達成される」と結論付けて、櫻井は、「四つの心理的欲求」を働かせて学習意欲が高まる過程を「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」とした(図3)。

表3 学習意欲を高める「四つの心理的欲求」

四つの心理的欲求	
知的好奇心	未知のことや詳しいことを知りたい
有能さへの欲求	もっと有能になりたい
向社会的欲求	人のためになりたい, 社会に貢献したい
自己実現の欲求	自分の長所を生かして自分らしく生きたい

これらの欲求は自ら学ぶ欲求の源であり、刺激・充足することで学習意欲を引き出すことにつながる。

櫻井(2019)は、「やる気」や「意欲(学習意欲)」は、心理学の「動機」と同義のもの捉え、「四つの心理的欲求」を刺激・充足することで学習意欲が高まると考えた(表3)。また、『主体的・対話的で深い学び』は、四つの心理的欲求をもとにした自ら学ぶ意欲が実現されることによって達成される」と結論付けて、櫻井は、「四つの心理的欲求」を働かせて学習意欲が高まる過程を「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」とした(図3)。

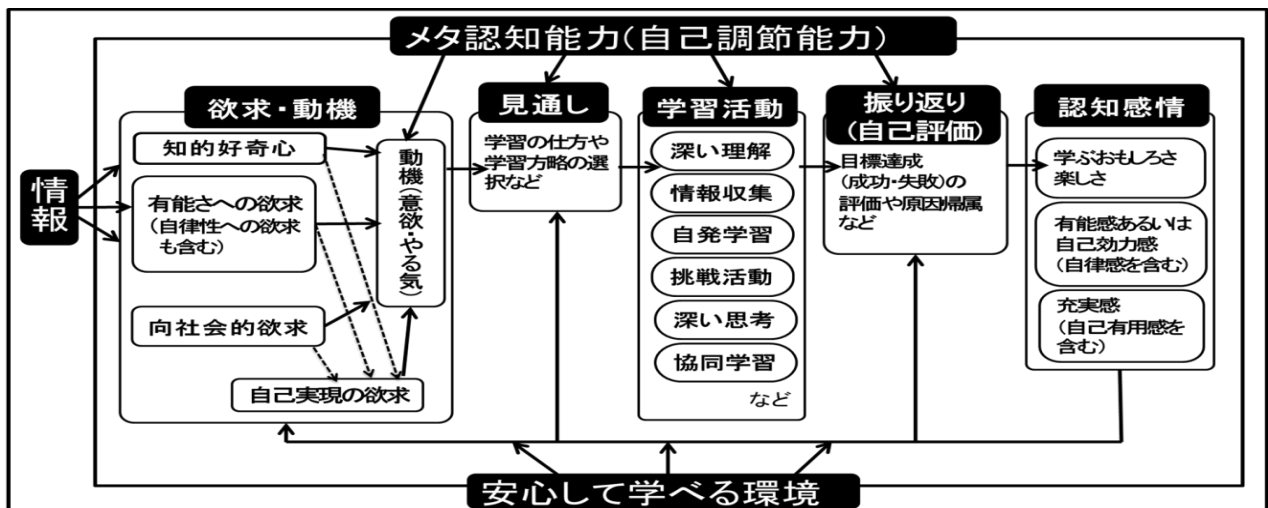


図3 「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」櫻井(2019)

このプロセスが生起するためには、「①安心して学べる環境」、「②情報」、「③生徒のメタ認知能力(自己調節能力)」が必要であるとした。※詳しくは、次項(2)①及び②で述べる。

そこで、本研究では、このプロセスを応用し、「生徒と創り上げる学びのプロセス」の工夫として国語科の学習指導に取り入れたい。授業に応用することで目的意識を持ち主体的に学びに向かう生徒の育成につながると考える。特に、学習への興味・関心、学習の見通しや振り返り、学習への粘り強い取り組みを通した「主体的な学び」を重視することで、目指す生徒像の実現に迫りたい。

(2) 「生徒と創り上げる学びのプロセス」を工夫した授業

櫻井(2019)を参考に、「生徒と創り上げる学びのプロセス」に取り入れる工夫について述べる。

① 「安心して学べる環境」と「情報」を大切に単元のデザイン

本項では、「自ら学ぶ意欲(学習意欲)」を生起させる「安心して学べる環境」と「情報」について述べる。筆者は、「安心して学べる環境」は、生徒が安心して学びに向かう環境、「情報」は、その環境の中で創り上げる学習過程(学習計画)と捉えた。両者が相互に働く単元デザインが目的意識を持ち主体的に学びに向かう生徒の育成につながると考える。

このことについて、原之國(2020)は、『しかけない』けれど『仕掛け』ていく『書くこと』の

実践」の中で、「生徒が国語科の学習を『嫌い／苦手』と感じる要因には、達成感や成長感の無さがある」と述べ。「言葉の力によって現実の世界が変わるという体験」を内在化した単元デザインを教師が仕掛けていくことが、生徒に達成感や成長感を与えるとしている。

原之國の「しかけない」とは、生徒が必然性を感じるような単元のデザインを教師が生徒に見えない形で「仕掛ける」ことである。

この理論を「生徒と創り上げる学びのプロセス」の「学習の動機づけや学習過程を生徒と共に創り上げる工夫」に取り入れる。原之國の単元デザインにおける留意点(表4)を踏まえて、「安心して学べる環境」と「情報」を相互に働かせた単元のデザインを行う。例えば、「安心して学べる環境」を整えるために、既有的知識を想起させ、学習の足場を揃えたり、学習に対する問いを持たせたりする。また、「情報(学習過程)」の工夫として、単元の学習計画も教師主導ではなく、生徒の意見や考えを取り入れながら創り上げていくことに取り組む。

表4 単元デザインにおける留意点 原之國(2020)

【「書く」必然性のあるデザインの実際】	
A	単元において身に付けさせる言葉の力を明確に設定する 【資質・能力の明確化】
B	「なぜ、効果的なのか／いつ・どのように活用できるのか」という理解を伴って、言葉の力を獲得するようにする【条件的知識の育成】
C	言葉の力によって現実の世界が変わるという体験が内在化し、子どもの実生活と学習が結び付けられていること【達成感と言葉の有用性の実感】

「安心して学べる環境」を整えるために、既有的知識を想起させ、学習の足場を揃えたり、学習に対する問いを持たせたりする。また、「情報(学習過程)」の工夫として、単元の学習計画も教師主導ではなく、生徒の意見や考えを取り入れながら創り上げていくことに取り組む。

② メタ認知能力を学習の調整に生かす学習評価の工夫

本項では、「自ら学ぶ意欲(学習意欲)」を生起させる「メタ認知能力」と学習評価との関係について述べる。

「メタ認知」とは、自己の認知のあり方に対して、それをさらに認知することである。

「解説総則編」では、「学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させていくこと」、「生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習につなげることができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要」であり、「学びに向かう力、人間性等」を育む上で、「自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる『メタ認知』に関わる力」が必要と述べられている。

高木(2019)は、「評価」について Evaluation(値踏みする)と、Assessment(支援する、支える)2つの側面で捉え、「Assessment(支援する、支える)の立場で評価を捉え、授業を通して『どのような力が身についたか』評価によって子どもたちに自覚させる」ことが大切だと述べた。

「生徒と創り上げる学びのプロセス」として評価規準をもとに、生徒と学びの段階を設定し目的意識を持って学ぶための学習評価の工夫を取り入れる。「学習評価」を生徒の学習状況を評価するものと捉え、教師が生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるように工夫したい。そこで「メタ認知能力」が果たす役割は大きいと考える。

生徒の「メタ認知能力」を可視化し、学習の調整に生かす学習評価を通して生徒の学習意欲や自己肯定感を高め、目標や課題をもって毎時間の学習に取り組めるようにしたい。具体的には、「プロセスシート」の記入を学習評価に役立てる。毎時間の学習を振り返り、次時の学習に向けて学習の調整を行えるようにするために授業の中で生徒が振り返りを行うために十分な時間を確保する。

例えば、「～ができた(できなかった)／～がわかった(わからなかった)」という従来の振り返りに加えて、「次の学習ではどうなっていたい」という学習の調整も含めた指導を行う。「～することで上手くいった。次は〇〇の方法を取り入れて～していく。」など、振り返りの視点や話型を示すことでメタ認知能力を可視化し、学びの段階を確認し、実感出来るような工夫をすることで生徒の主体的な学びにつなげていく。

③ 目的意識を持ち主体的に学びに向かう生徒を育成する「プロセスシート」

前項までに述べた内容を踏まえて「プロセスシート」を作成した。目的意識を持って主体的に学びに向かう生徒の育成をめざし、「生徒と創り上げる学びのプロセス」を工夫する授業づくりにおいて活用する。上段の「学習計画表」をもとに、学習に対する見通しを持つ。下段の「振り返

り・学習の調整」では、授業の振り返り、学習の調整を行い、次の学習につなげていく。授業で活用する場面や目的について、以下に示す（資料1）。

「安心して学べる環境」+「情報(学習過程)」+「メタ認知能力」=「プロセスシート」

授業で活用する場面と学習活動の流れ

導入

- 学習計画を確認
- めあてを設定する
- 今日の学習ゴールを設定する

展開

- 学習計画に合わせて学習開始
- 今日の学習ゴールをもとに学習評価を行う

終末

- 振り返りと学習の調整 ※次の学習につなげることをまとめる

「プロセス会議」で生徒と設定した単元の学習ゴールと学習計画をもとに「書くこと」の単元学習を展開

**「プロセスシート」を毎時間の学習に生かす
学習の見通し、学習評価、振り返り・学習の調整、粘り強い取り組みへ**

【学習のゴール】 随筆を書き上げ、みんなで読み合って感想を伝え合おう！

めざせ、随筆名人！自分の体験と考えを書きつづろう

400字 1作熟達コース

共有・交流する

共有・交流する

共有・交流する

【ステージ1】 随筆を書く方法を学ぶ
情報を集める
内容を考える
題材を決める
共有・交流する

【ステージ2】 考えを形にする
構成を考える
共有・交流する
推敲する

【ステージ3】 清書する
推敲する
共有・交流する

【ステージ4】 随筆を書き上げる
単元のまとめ振り返り
共有・交流する

めざせ、随筆名人！
一年四組の学習計画表
学習計画表(上段)

「プロセスシート」活用の目的

- 興味・関心を高める
- 学習の見通しを持つ
- 学習を振り返って次の学習につなげる
- 自分と結び付ける次の自分を見通す
- 単元を通した活動で粘り強く学ぶ

プロセス会議 (文月 八 日)	ステージ1 (文月 10 日)	ステージ2 (文月 13 日)	ステージ3 (文月 14 日)	ステージ4 (文月 15 日)
<p>【学習の振り返り】 今日の振り返り 今日の振り返り 今日の振り返り</p> <p>今日の振り返り 今日の振り返り 今日の振り返り</p>	<p>今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り</p> <p>今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り</p>	<p>今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り</p> <p>今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り</p>	<p>今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り</p> <p>今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り</p>	<p>今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り</p> <p>今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り 今日の学習の振り返り</p>

【振り返りに付いた】
日曜日の朝の時間を決めて、毎日の振り返りをして、自分の体験と考えをしっかりと書くことに挑戦しよう。

振り返り・学習の調整(下段)

資料1 「プロセスシート」の実際

IV 検証授業

- 1 単元名 「めざせ、随筆名人！自分の体験や考えを書きつづろう」
- 2 教材名 体験したことを文章にする（随筆を書く）「伝え合う言葉1」（教育出版）
- 3 単元設定の理由

(1) 教材観

本単元は、中学校で初めて学ぶ「書くこと」の教材である。小学校5、6学年では、「目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係づけてたりして、伝えたいことを明確に」して書く学習を行ってきた。本単元では、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にして随筆を書くことに取り組む。生徒にとって、「随筆」を書くことは、小学校の言語活動の系統を見ても初めてのことであり、日記や説明文とは違った随筆ならではの表現の魅力に気づかせ、実際に生徒自らが書く活動に取り組ませたい。

(2) 生徒観

平成 31 年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査及び児童質問紙の国語の授業に関する項目において、「目的に応じて、自分の考えを書く」ことに対して、本県は、実感が伴わないと感じている児童生徒が多い。小中共に「目的に応じて」学ぶことを実感させる授業づくりに課題がある。

単元を通して、「何のために書くのか」（学ぶ意義）、「書くことによって、何が身に付いたか」（学習評価）を明確にすることで、生徒が目的意識を持って学びに向かわせ、「目的に応じて」思考・判断・表現することにつなげたい。

表5 「検証授業前生徒アンケート（1年4組）」より

No.	質問項目	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
1	国語の勉強は大切だ	76.5%	20.6%	2.9%	0%
2	国語の授業で学習したことは、将来や社会に出たときに役に立つと思う	79.4%	11.8%	8.8%	0%
3	国語の授業では、学習のゴールを意識して取り組んでいる	23.5%	50.0%	23.5%	2.9%
4	国語の授業で学習目標や学習の計画を自分たちで立てて取り組む学習をやってみたいと思う	29.4%	38.2%	23.5%	8.8%

表5は、検証授業前の生徒アンケート結果である。項目1「国語の勉強は大切だ」について、肯定的な生徒(97.1%)、否定的な生徒(2.9%)がいる。項目2も肯定的な生徒が9割を上回っており、国語の学習に対する必要性を感じている生徒が多い。生徒の実態を踏まえて、国語の学習に対する意義や有用感が高まる授業を行いたい。

事前の授業観察では、生徒の多くが、学習内容をノートにまとめたり、授業のまとめに振り返りを書いたりする習慣が身に付いている。めあての提示や学習の見通しの持たせ方を工夫し、目的意識を持って授業に取り組むよう指導していく。そのためには、次の学習の見通しや課題の解決に向かう意欲を持ち、自己の学びの段階を確認できる主体的に学習に取り組む態度を育てていく。

(3) 指導観

目的意識を持ち主体的に学びに向かう生徒を育成するためには、学習意欲を向上させること大切である。書く活動に対する興味や関心を持たせたり、学習に対する見通しを立てたり、毎時間の学習の振り返りと、よりよく書き上げるために学習の調整を繰り返すことが「生徒と創り上げる学びのプロセス」の工夫として働き、学習に粘り強く取り組み、「主体的な学び」につながると考える。

そこで、単元の学習ゴールと随筆を「書く」ための学習計画を生徒と立てることで「自分ごと」の学びになるよう意識させたい。単元の学習を通して、「何のために（目的意識）」、「誰に（相手意識）」、「どのような方法（方法意識）」で書くのか生徒に問うことで、「何のために学ぶのか（学ぶ意義）」を明確にしていく。主体的に学習に取り組む態度を育てるため、毎時間の振り返りの時間を大切にする。「プロセスシート」を活用し、本時の学習の振り返りと学習の自己調整を行う時間を確保することで「できたこと、わかったこと」を振り返り、「次の学習ではどのようになっていたいか」学習の調整を行わせる。このような粘り強い学習への取り組みを通して、目的意識を持ち、主体的に学びに向かう生徒を育成することにつなげたい。

4 単元の指導目標

(1) 目標と評価規準

① 単元の目標と身に付けさせたい力

【単元の目標】・目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。

B書くこと (1) ア

【身に付けさせたい力】 日常生活の中から題材を決めて、集めた材料を整理して、自分の体験と考えがわかりやすく伝わる文章を書く力

② 各学年の指導の系統

※指導の系統がわかるよう下線等を記す(筆者)。

(小) 第5学年及び第6学年	(中) 第1学年	(中) 第2学年	(中) 第3学年
(1) 書くことに関する次の事項を身に付けることができるように指導する。			
ア 目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係づけたりして、伝えたいことを明確にすること。	ア 目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。	ア 目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、多様な方法で集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。	ア 目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、集めた材料の客観性や信頼性を確認し、伝えたいことを明確にすること。

<p>「書くこと」の言語活動の系統（小学校）</p> <p><第1学年及び第2学年>身近なことや経験したことを報告，観察記録，見聞きしたことを書く，日記等</p> <p><第3学年及び第4学年>調べたことを報告，行事の案内，お礼状，手紙，詩や物語を作る</p> <p><第5学年及び第6学年>目的や意図に応じて書く活動（意見文），思いを伝える文章を書く活動（卒業文集を作る）等</p>
--

(2) 単元の指導事項と評価規準

	知識及び技能	思考・判断・表現【B書くこと】	主体的に学習に取り組む態度
指導事項	(1)言葉の特徴や使い方の事象や行為，心情を表す語句の量を増やすとともに，語句の辞書的な意味と文脈上の意味上との関係に注意して話や文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにすること。	・目的や意図に応じて，日常生活の中から題材を決め，集めた材を整理し，伝えたいことを明確にすること。	・言葉を通じて積極的に人と関わったり，思いや考えを確かなものにしたたりしながら，言葉がもつ価値に気付こうとしているとともに，進んで読書をし，言葉を適切に使おうとしている。
満足できる(B)	・事象や行為，心情を表す語句の量を増やし，文章の中で使うことを通して，語感を豊かにしようとしている。	・随筆を書く活動において，目的や意図に応じて日常生活の中から題材を決め，集めた材料を整理し，伝えたいことを明確にして書いている。	・自分の考えが伝わる文章になるように工夫し，学習の見通しをもって粘り強く書こうとしている。
十分満足できる(A)	・事象や行為，心情を表す語句の量を増やし，辞書的な意味と文脈上の意味を検討し，文章の中で使うことを通して，語感を磨き語彙を豊かにしようとしている。	・随筆を書く活動において，目的や意図に応じて日常生活の中から題材を決め，構成を工夫したり，考えを共有しながら推敲したり，集めた材料を整理し，伝えたいことを明確にして書いている。	・自分の考えが伝わる文章になるように見通しを持ち，積極的に仲間と関わったり，辞書などを活用したりしながら，よりよい文章になるように学習を調整し，粘り強く書こうとしている。
<p>努力を要する状況(C)への手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習過程で「ヒントカード」や「学習モデル」を提示し，具体的に書けるように支援する。 ・グループの仲間の考えを参考に，書きたいと思える話題やまねてみたい点を見つけられるように支援する。 			

(3) 単元の指導計画（全5時間）

「生徒と創り上げる学びのプロセス」には，学習過程を生徒と共に創り上げる工夫を取り入れた。第1時間目の「プロセス会議」では，教師の案を示しながら，生徒の意見や考えを取り入れ，単元の学習のゴールや学習計画を設定した。以下に，教師の案と実際に生徒と設定した学習計画を示す。

① 教師が立てた単元の指導計画

時	学習活動 ◆ねらい	評価方法・留意点
単元の見通し	<p>◆「プロセス会議」を行い，単元の学習計画を立てる。</p> <p>①学習の足場を揃える。これまでの「書くこと」の学習を振り返る。</p> <p>②身に付けたい力を確認する。「何のために」「どんな方法」でどんな文章を書くのか目的意識を持ち，主体的に学びに向かうよう学習のゴールを具体的に決定する。</p> <p>【学習のゴール（教師案）】随筆を作り座談会を開催，随筆コンテストを企画，後輩へ披露</p> <p>③第2時以降の学習計画を立てる。</p>	<p>主体的に学習に取り組む態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元を通して，授業の終末には「プロセスシート」の記入を継続することで，学びの自己調整と粘り強く書くことにつなげる。
情報収集・内容構成の検討	<p>第二時間目以降は，第一時間目の単元設定を踏まえて変更</p> <p>教師案① 短編2作 上達型（200字2作）</p> <p>教師案②本編1作 熟達型（400字1作）</p> <p>◆随筆を書く方法を学び，使ってみたい言葉を増やし，必要な情報を集めさせる。</p> <p>【つかむ】</p> <p>①前時に立てた学習計画表（決定版）を提示，生徒と確認後，学習を開始する。</p> <p>②随筆と他の文章との違い，表現方法の工夫について知る。※「随筆の手引き」</p> <p>③心情を表す言葉など，使ってみたい言葉を増やす。</p> <p>④思考ツールを活用し，書く情報を整理する。「情報マップ」を作成</p> <p>⑤プロセスシートの記入を行わせる。（ステージ達成評価，振り返り，自己調整）</p>	<p>知識及び技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・随筆と他の文章との違いに気づかせたり，使ってみたい言葉の検討をさせたりしながら，語彙を豊かになるよう支援する。
考えの形成・記述・共有	<p>◆必要な情報を整理して書かせる。</p> <p>【深める】</p> <p>①第一作目の作成（200字）</p> <p>②付箋紙で相互交流を行わせる。</p> <p>③相互評価を踏まえて推敲，清書する。</p> <p>④「プロセスシート」の記入</p>	<p>主体的に学習に取り組む態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒に主体的な学びを促すため，アイデアを提示して書けるよう支援する。 <p>思考・判断・表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「五つの言語意識」を踏まえて，目的や意図に応じて，伝えたいことを明確にして書かせる。

共有・推敲・記述	第四時間目 本時	◆自分の体験や考えが相手に伝わる文章を書かせる。【まとめる】 ①相互交流「マイクロ（メタ）・プロセス会議」を行わせる。 ②第2作目を書く。 ③「プロセスシート」の記入	◆自分の体験や考えが相手に伝わる文章を書かせる。【まとめる】 ①相互交流の結果を踏まえて、使ってみたい言葉や表現の検討を行い、推敲させる。 ②推敲した文章を清書する。 ③「プロセスシート」の記入	思考・判断・表現 ・「五つの言語意識」を踏まえて、目的や意図に応じて、伝えたいことを明確にして書くよう支援する。
	第五時間目	◆学習したことを振り返り、単元のまとめを行わせる。【つなげる】 ①前時の続き、清書をする。 ②相互評価、総括を行う。 ③単元のまとめ（個人内評価）を行う。	◆学習したことを振り返り、単元のまとめを行わせる。【つなげる】 ①前時の続き、清書をする。 ②相互評価、総括を行う。 ③単元のまとめ（個人内評価）を行う。	主体的に学習に取り組む態度 ・単元を通じた自己の学習を振り返らせ、事後や今後の学びにつなげるよう支援する。

②生徒と共に設定した単元の学習計画

時	学習活動 ◆ねらい	評価方法・留意点
第一時間目 (プロセス会議)	◆単元の学習計画を設定する「プロセス会議」を行い、学習の見通しを持たせる。 ・これまでの「書くこと」の学習を振り返り、学習の足場を揃える。 ・身に付けたい力を確認する。「何のために」「どんな方法」でどんな文章を書くのか目的意識を持ち、主体的に学びに向かうよう学習のゴールを具体的に決定する。 ・第2時以降の学習計画を立てる。 [次時の見通し（予告）] 題材、使ってみたい言葉を集めておく。	主体的に学習に取り組む態度 ・単元を通して、授業の終末には「プロセスシート」の記入を継続することで、学びの自己調整と粘り強く書くことにつなげる。
第二時間目 (ステージ1)	生徒と設定した学習計画 ・随筆を書く方法を学ぶ ・情報を集める ・内容を考える ・共有、交流する ・題材を決める 教師の手立て ◆随筆の書き方について指導し、情報収集、題材を決定させる。 ・前時に立てた学習計画表を提示し確認する。 ・随筆と他の文章との違い、表現方法の工夫、心情を表す言葉や使ってみたい言葉について興味を持たせる。 ・思考ツールを活用し、書く情報を整理させる。	知識及び技能 ・随筆と他の文章との違いに気づかせたり、使ってみたい言葉の検討をさせたりしながら、語彙を豊かになるよう支援する。
第三時間目 (ステージ2)	・考えを形にする ・構成を考える ・共有、交流する ・下書きをする ・推敲する ◆必要な情報を整理して書かせる。 ・集めた情報を整理して、構成を考えながら下書きを行わせる。 ・交流の視点を示し、相互交流させる。	主体的に学習に取り組む態度 ・生徒の主体的な学びを促すため、アイデアを提示して書けるよう支援する。
第四時間目 (ステージ3) (本時)	・清書する ・推敲する ・共有、交流する ◆自分の体験と考えが伝わる文章を書かせる。 ・相互交流の結果を踏まえて、使ってみたい言葉や表現の検討を行い、推敲させる。 ・身に付けたい力に迫る文章になるよう、清書の見通しを持たせる。 ・書いた文章は消さず、訂正、加筆するよう指導する。 ・推敲した文章を清書する。	思考・判断・表現 ・「五つの言語意識」を踏まえて、目的や意図に応じて、伝えたいことを明確にして書くよう支援する。
第五時間目 (ステージ4)	・随筆を書き上げる ・単元のまとめ、振り返り ・学習のゴールに共有、交流する ◆単元の学習をまとめ、振り返らせる。 ・相互評価を行わせる。※評価規準に基づく観点を示す ・単元のまとめ（個人内評価）を行う。 ・「プロセスシート」や自分の作品を読んで、学習したことを振り返る。 ・学習の振り返り、今後の学習につなげたいことを書かせる。	主体的に学習に取り組む態度 ・単元を通じた自己の学習を振り返らせ、事後や今後の学びにつなげるよう支援する。
【1年4組の学習のゴール】随筆を書き上げ、みんなで読み合って感想を伝え合おう！		

5 本時の指導（第4時間／全5時間）

(1) 本時の指導目標

目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にして書くことができる。

(2) 本時の目標を達成した生徒の姿




学習したことを振り返りながら、表現や構成を工夫し、話題を整理して、自分の体験と考えが相手に伝わるようにわかりやすく書くことを意識して、粘り強く書くようになるだろう。

(3) 検証の視点

視点①主体的に学びに向かう生徒を育成するために、学習過程を生徒と共に創り上げる工夫

視点②評価規準をもとに生徒と学びの段階を設定し目的意識を持って学ぶための学習評価の工夫

(4) 本時の展開 (第4時間/全5時間)

過程	【学習活動】(内容・発問)	【指導上の留意点】	【評価規準・方法】 ☆Cへの手立て 検証の視点
導入 5分	①本時の学習計画を確認する 【学習計画】・推敲する/・共有,交流する/・清書する	・目的意識を持ち、主体的に学びに向かうよう、学習計画をもとに、本時のめあてを生徒と考え	主体的に学習に取り組む態度 ・ノート ・ワークシート
展開 37分 前段 10分	②めあての確認 【めあて】自分の体験と考えが伝わる随筆になるように推敲しよう。		検証の視点② ☆「随筆の手引き」を提示する。  随筆の手引きを活用する生徒
後段 27分	③学習の見通しを持つ ステージ3では、どの段階まで達成したら、Bランク(全員到達)ですか。 ・「身につけたい力」に迫るため、「今日の学習ゴール」(学習評価の目安となる段階)を設定する。 →自分の体験と考えを400字に近づけて書いていたら「B」 →「随筆の技」を使って、わかりやすく書こうと工夫していたら「A」 →200字以下なら「C」	・自分の体験と考えがわかりやすく伝わる「随筆」を書くために、本時の学習の見通しを持たせる。	検証の視点① 思考・判断・表現【Bウ】 ・ワークシート ☆「学習のヒント」を示す。  共有,交流する生徒たち
終末 8分	④自分の体験と考えが伝わる「随筆」を書く ・これまでの学習過程で得たことを生かして、「随筆の手引き」を参考に、400字程度で書く。 ※後段開始10分頃から (今日の学習ゴールを達成するために)お互いに交流してはどうですか? 【共有・交流の視点】 ①自分の体験と考えを書いているか ②「随筆の技」や表現の工夫があるか ※互いの文章を読み合い、自分の作品に生かす。	・「五つの言語意識」を意識させたり、手引きを活用させたりして書き上げるよう指導する。 ・机間指導、個別指導を行いながら、よりよい文章を書けるように相互交流の場が持てるように促す。	検証の視点② 主体的に学習に取り組む態度 ・プロセスシート  振り返り,学びの調整をする生徒
	⑤「プロセスシート」の記入 ・本時の学習ゴールを踏まえて、振り返り、自己調整を行う。 ※記入後、書き終えていない生徒は清書を行う。	・主体的に学びに向かう生徒の育成をめざし、単元の導入時に書き方を示し、毎時間の学習の振り返り、学びの自己調整を行わせ、粘り強く学習に取り組むよう指導していく。	

(5) 板書計画



V 研究の結果と考察

1 主体的に学びに向かうための学習の動機づけや学習過程を生徒と共に創り上げる工夫

(1) 学習の動機づけを大切に導入の工夫

単元の導入時に、生徒が学習の見通しを持ち、安心して学べるよう学習の動機づけを以下の通りに行った。中学校で初めて学ぶ「書くこと」の学習であることを踏まえて、小学校で学んだ「書く

こと」の学習活動を想起させる発問を行ったり、古典教材「枕草子」「徒然草」の冒頭を提示したり、随筆の学習に興味や関心を持たせた。

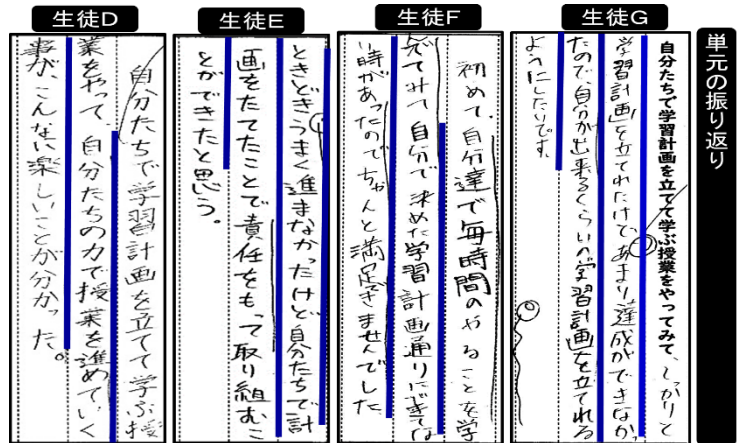
【生徒A】	随筆は、自分が思った通りに書けるので、とてもいいと思う。400字を書くのは、まだ不安なので次の時間に書き方を教わって、ゆっくり書いていきたい。
【生徒B】	次の時間にたくさんの情報を集めて色々な文の候補ができるように頑張りたい。想像豊かに文章が書けるようにしたい。
【生徒C】	随筆のことが知れて、学習のゴールを決めることができた。次は題材を決められたらいいと思う。

資料2 第1時間目「プロセス会議」後の生徒の振り返り

資料2より、随筆を書き上げるという未知なる課題に対して、これまでに学んできた力を生かして達成したいという生徒の思いや学習の見通しを持って学ぼうとする生徒の姿が見える。これまでの学習を振り返ることで学習の系統性を想起させ、学習の足場を揃えることにつながった。また、「随筆」を書くという未知なる課題に対して、既存の知識を基に取り組んでいくという見通しを持つことができ、生徒の知的好奇心を高めることにつながった。学習の動機づけの工夫が「安心して学ぶ環境づくり」に有効に働き、生徒の主体的な学びにつながったと捉える。

(2) 生徒と共に学習過程を創り上げる工夫

教師主導の学習計画を提示するのではなく、「こういう形で単元の学習のゴールを設定し、学習計画を立てて学びたい」という生徒の意見や考えを取り入れ、生徒と共に創り上げる学習過程の工夫をめざした。資料3は、単元の振り返りに「自分たちで学習計画を立てて学ぶ授業について」生徒が書いた文章である。「自分たちの力で授業を進めていく事がこんなに楽しいことがわかった」(生徒D)のように、全体的に学習計画を立てて学んだことで達成感や充実感を味わった生徒が多かった。自分たちで学習計画を立てたことで「責任を持って取り組むことができた」と感じる(生徒E)、学習計画通りに進めない時があったので「ちゃんと満足できなかった」と感じる(生徒F, G)がいた。生徒F, Gの学習評価は「大変満足(Aランク)」だったことから、納得のいく学習にするために次の学習に向けた課題を見つけ、学習の調整が働いたと捉える。



資料3 単元の振り返り(生徒記述)

「責任を持って取り組むことができた」と感じる(生徒E)、学習計画通りに進めない時があったので「ちゃんと満足できなかった」と感じる(生徒F, G)がいた。生徒F, Gの学習評価は「大変満足(Aランク)」だったことから、納得のいく学習にするために次の学習に向けた課題を見つけ、学習の調整が働いたと捉える。

図4は、「生徒と学習計画を設定する学習」に関するアンケート結果である。「自分たちで学習目標や学習計画を立てて取り組む学習をやってみたいと思うか」について、検証前後のどちらも肯定的な生徒の割合が高かった。具体的にみると、検証前(67.6%)よりも検証後(81.3%)は、13.7ポイント増え、自分たちで学習計画を立てて学びたいという生徒の思いが明確に数値に現れている。この結果は、検証を行ったすべての学級に共通していた。

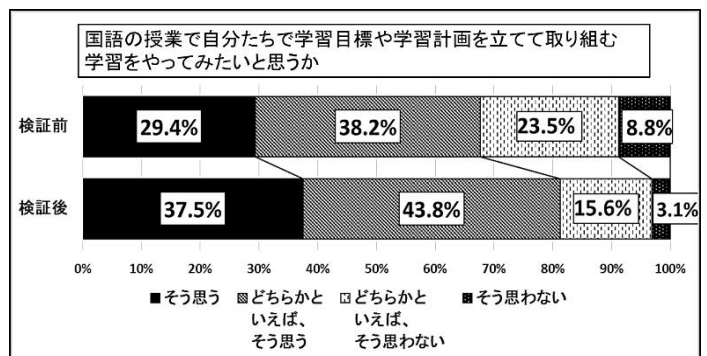


図4 「生徒と学習計画を設定する学習」に関するアンケート

このように、生徒の意見や考えを取り入れ、生徒と共に単元の学習ゴールや学習計画を具体的に設定することで、生徒は自分ごとの学習として責任を持ち、学習計画を達成しようと粘り強く学習に取り組み、達成感や充実感を味わうことにつながり、目的意識を持ち、主体的に学びに向かうことが明らかになった。

2 評価規準をもとに生徒と学びの段階を設定していく学習評価の工夫

評価規準をもとに生徒と学びの段階を設定していく学習評価の工夫として、次の2点を取り入れた。『今日の学習ゴール』を設定し学びの段階を確認する工夫と「生徒のメタ認知能力を可視化し学習の調整に生かす工夫」である。

(1) 「今日の学習ゴール」を設定し学びの段階を確認する工夫

「プロセスシート」の活用では、生徒が各自の学びの段階を確認し、学習評価に生かすよう工夫した。毎時間の授業で「今日の学習ゴール」設定する意図は、本時のめあてに対して達成の方法を考え学習の見通しを持たせたり、学習を振り返って学習の調整に生かしたりするためである。

図5は、「学習評価」に関するアンケート結果である。「授業のめあてに対して、達成する方法を考えたり、学習の見通しを立てたりして学習評価にいかしているか」について、肯定的な生徒の割合が、検証前(67.7%)よりも検証後(90.7%)は、23ポイント増えた。このうち、「そう思う」と感じている生徒が、検証前(32.4%)よりも検証後(59.4%)は、27ポイント高まっており、生徒の中で学習の見通しを持つことや授業のめあてを達成する方法を考えたりすることで学習評価に対する意識がより具体的になっていることがわかった。

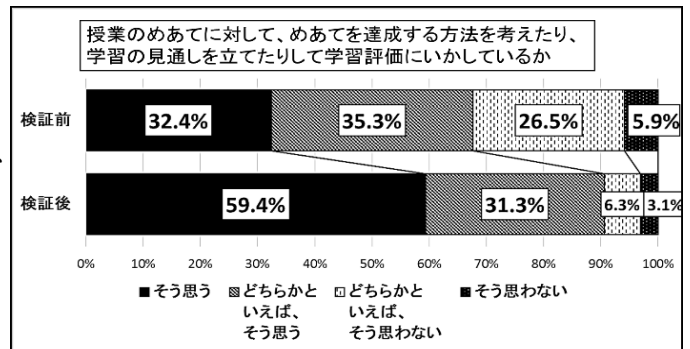


図5 「学習評価」に関するアンケート

生徒が記入した「プロセスシート」をもとに学習評価の様子を捉える(資料4)。

「今日の学習ゴール」を意識した後

ステージ4 (文月15日)	ステージ3 (文月14日)	ステージ2 (文月13日)
(一) 課題をこなした (二) 正解を導き出した (三) 正解を導き出した (四) 正解を導き出した	(一) 課題をこなした (二) 正解を導き出した (三) 正解を導き出した (四) 正解を導き出した	(一) 課題をこなした (二) 正解を導き出した (三) 正解を導き出した (四) 正解を導き出した
交流できるところにしたいです。	休時間にもう少し、時間を取ります。	由はほど、書き進めたいです。

意識する前の学習評価

ステージ1 (文月10日)	プロセス会議 (文月10日)
(一) 課題をこなした (二) 正解を導き出した (三) 正解を導き出した (四) 正解を導き出した	(一) 課題をこなした (二) 正解を導き出した (三) 正解を導き出した (四) 正解を導き出した
決まらなかつたので、時間を取ります。	決まらなかつたので、時間を取ります。

資料4 学習評価に生かす「プロセスシート」(生徒の変容)

本研究では、「振り返り(〜がわかった、できた)」に加えて、次時の学習につなげる「学習の調整」を行うよう「プロセスシート」に話型を示した。単元の前半は、話型を参考に「次は〇〇」とまとめているが、自分の学びの段階を意識させ、学習評価をもとに次につなげることは課題があった。そこで、導入で「今日の学習ゴール(具体的な学びの段階)」を生徒と設定して学習に取り組みさせた(資料5)。その結果、学習計画と自分の進捗を確認しながら学習を見通したり、「今日の学習ゴール」に対する自分の段階を確認

「ステージ4」の場合 本時のめあて 自分の体験と考えをわかりやすく伝える随筆を目指して書き進めよう。	「今日の学習ゴール」 随筆に書くことを決めて書き進めている。(もうすぐ仕上がるレベル)	Bランク わかりやすく書く工夫をして、随筆を完成に近いレベルまで書き上げている。 ・推敲しながら書いている ・共有でアドバイスをもらったり、資料やモデル文を参考にしたりして書いている	Aランク ランクを満たし、随筆の技を使って書いている。 ・二つわざ術・題名ごたわり術・書き出し術 ・「術」文体の術・使ってみよう言葉術	Sランク
---	---	---	---	-------------

資料5 「今日の学習ゴール」設定の様子

しながら学習評価を行ったりするようになった。次時の学習を見通して、「よりよく書くために、次回はどうなっていたいか、そのために次回までにどうすればよいか」具体的に考え、毎時間の学習の調整を重ね、目的意識を持って主体的に学びに向かう生徒の姿を捉えることができる。

このように、めあてに正対する「今日の学習ゴール」を生徒と設定することで、めあてを達成する方法を具体的に考え、学習に見通しを持って取り組み、振り返りでは生徒自ら学習の達成状況を確認しながら次時に向けた学習の調整に生かすことにつながった。

(2) 生徒のメタ認知能力を可視化し学習の調整に生かす工夫

「プロセスシート」の記入が学習評価に生かされ、学習意欲を高めることにもつながるように、メタ認知を可視化しながら学習の調整ができるよう工夫した(資料6)。

毎時間の学習評価は、数値やランク付けによる評価ではなく、4項目の中から該当するものに「○」をつける方法を取り入れた。該当するものを一つ選ぶと想定していたが、資料6の生徒のように、学習評価は「とても満足」と「課題が多くみつかった」の2つに「○」をつける生徒もいた。「課題が多く見つかり、とても満足」という生徒の声を見取ることができる。Assessment(学習を支援する)立場で学習評価を工夫すると毎時間の学習に課題を見出しながら前向きに取り組み、「課題が多い」ことを肯定的に捉えて、粘り強く学ぶことにつながった。

このように、メタ認知を可視化しながら学習の振り返りや学習の調整を行わせることで、生徒は目的意識を持ち、毎時間の授業を自分ごととして受けとめ、粘り強く取り組み、個々の進度を調整しながら、主体的に学びに向かう力を育てることにつながった。

メタ認知の可視化と学習の調整

学習の振り返りと次への調整	プロセス会議 (文月 日)	学習評価
	(○) とても満足 () まあまあ満足 () 少し課題が見つかった (○) 課題が多くみつかった	

～すると上手いだったので
○○する
～を参考に○○したい
～に課題があったので次
は○○する
など、語形を示す

今日の学習ゴールに向けての計画を
立てられた。課題は、
長かった。随筆は40文字書くのは、大
そう、と思った。4時間で終わらせた。

資料6 「学習評価」の様子

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 「生徒と創り上げる学びのプロセス」を工夫した学習指導を通して、目的意識を持ち主体的に学びに向かい「目的に応じて」思考・判断・表現する生徒の育成につながった。
- (2) 学習の動機づけや学習過程を生徒と共に創り上げる工夫では、単元の学習ゴールや学習計画を生徒と明確に設定することで、生徒は自分ごとの学習として目的意識を持ち、粘り強く学習に取り組む、主体的に学びに向かうようになった。
- (3) 「生徒と創り上げる学びのプロセス」を工夫する学習を進めることで、生徒は課題に対して責任を持って向き合うようになり、「書くこと」にやりがいを感じ、達成感を味わうことにつながった。

2 研究の課題

- (1) 評価規準や学習計画をもとに生徒と学びの段階を設定し学習評価を工夫するために「今日の学習ゴール」を設定した。毎時間の学習の段階を確認させることで「学習の調整」に対する意識が高まってきたが、生徒が目指す段階に対して、達成するための方法を具体的に考えて取りまさせるには課題が残った。生徒の学習を支援する立場の学習評価が充実するよう、今後も工夫と改善を重ねる。
- (2) 本研究における学習指導の継続が、生徒が自らの将来を切り拓くプロセスにつながると考える。今後も生徒と共に学習を創り上げていく指導を繰り返すことで、よりよい未来の創り手となる資質・能力を育成することにつながると考える。

<主な参考文献>

- | | | |
|---|--------|-------|
| 櫻井茂男著 『自ら学ぶ子ども』 | 図書文化社 | 2019年 |
| 高木展郎著 『評価が変わる、授業を変えるー資質・能力を育てるカリキュラム・マネジメントとアセスメントとしての評価』 | 三省堂 | 2019年 |
| 文部科学省 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』 | 東洋館出版社 | 2018年 |
| 文部科学省 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』 | 東洋館出版社 | 2018年 |